SIASR (Saitama Infectious Agents Surveillance Report)

平成 18 年 7 月 12 日

埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況（2006.7.7 現在）

埼玉県で分離され衛生研究所で確認された3類感染症である腸管出血性大腸菌は、2006 年 7 月 7 日現在で 48 株と、昨年同時期の 29 株より増加しています。分離血清型は O157 が最も多く、O157:H7 が 29 株、O157:H-が 1 株でした。その他の血清型では O111:H-が 16 株、O26:H-と O103:HUT がそれぞれ 1 株分離されています。月別の分離数では1月に2株、2月、3月は分離がありませんでしたが、4月に7株、5月に11株、6月に24株と分離株数が増加しています。7月も7日現在で4株分離されており、気温の上昇など腸管感染症の発生しやすい状況が今後続くことから、注意が必要です。

衛生研究所では、分離株数の多い O157:H7 についてはすべての株を、その他の血清型についても必要に応じてPFGE 法を用いた DNA 切断パターンによる型別を行っています。4月に腸管出血性大腸菌 O111:H-（VT1&2）による感染症が、県内で3事例発生しました。この3事例はすべて異なる地域で発生したにもかかわらず、分離菌株の薬剤耐性や PFGE パターンは同一あるいは非常に類似していました。近県でも同様の血清型による散発例が発生しており、共通の感染源が示唆されましたが、その究明には至りませんでした。また現在までに O157:H7（VT1&2）12 株は 3 パターン、O157:H7（VT2）17 株は 8 パターンに型別されました。県北部で発生した O157:H7（VT1&2）による散発事例では、同一の DNA 切断パターンを示し、隣接する他県でも同時期に3類感染症の報告数が増加しているため、調査を進めています。O157:H7（VT2）による事例では、異なる時期の複数グループが共通の焼肉店を利用していたことが疫学調査で判明し、PFGE パターンも同一でした。しかしこれらの集積性のあるパターン以外にも県全体では多様なパターンが存在することから、複数の感染源が考えられ、今後とも注意する必要があると考えられました。

今後とも原因究明調査等へのご協力をお願いします。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型(2006.7.7 現在)

血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1&2	12
O157:H7	VT2	17
O157:H－	VT2	1
O26: H－	VT1&2	1
O111:H－	VT1&2	16
O103 :HUT	VT1	1
合計		48